

# 人びとを把握する

## 朝鮮動乱期佐世保への人びとの流入と行政の取り組みを事例に

東京大学大学院学際情報学府博士課程  
團康晃

### 1 目的

佐世保市の市勢要覧に見られる繁華街に関する記述は、朝鮮動乱をまたいで大きく変化していた。旧軍港市転換法のもとに復興へと向かうという説明は、朝鮮動乱を境に後景に退き、「国際色豊かな街」という説明が繰り返されるようになったのである。

本報告の目的は、戦後史や基地研究において一つの事例として紹介されることの多い、朝鮮動乱期の特需を佐世保という具体的な街を具体的なフィールドとし、朝鮮動乱発からの六カ月間に起こった街の劇的な変化——人びとの流入、そこでの街の変化と市の市に対する記述＝理解——を、当時の現地の新聞や、聞き取り調査をもとに描き出すことである。その記述は、当時の報道機関や行政の、基地や将兵、基地の街に流入する人へのまなざしの編成を明らかにし、その中で特に行政機関は如何にして(統計等を用いて)流入する人びとを把握し、条例等の制度の立ち上がりに至るのか、新しい現状認識が如何なる知の下に把握され、制度へとフィードバックされるのか、その相互作用を明らかにする。

### 2 方法

データとして、当時の郷土新聞の記事、市の統計資料、雑誌、書籍といった文献資料と、当時を知る市民への聞き取りを用いる。分析の主眼は、新聞に見られる街の変化の記述、読者からの投書に見られる街の問題の在り方、さらにそのような人々のまなざし、街の理解の変化と共に、様々な取締、調査が行われ、さらに条例や組合の成立など、制度へとフィードバックされていく過程、その相互作用である。

### 3 結果

朝鮮動乱勃発によって、多くの人びとが市に流入し、繁華街の風景は大きく変わった。特に新聞で繰り返し問題化されるのは、「土産店」、「パンパン」、「輪タク」だった。市民はこれら動乱によって変わる街の風景を問題化し、紙面では時に市役所の担当職員が対応についての弁かいを述べていた。その中でも特に明確な対応がなされていったのは、「輪タク」と「パンパン」である。「輪タク」はまず将兵の移動手段である一方、将兵と「パンパン」とを取り結ぶ仲介業を行う者もいた。一方、戦中特に戦後より登場した「パンパン」というカテゴリーで記述される女性達は、その就労環境等から、把握が難しかった。彼女等に対し、ある市民は新聞紙面で「税金をとれ」と提案し、市役所はその提案に対する応答を行う。また、行政は様々な手段で彼女らの状況を把握しようと努める。その把握の過程の中で彼女らの就労環境は様々に細分化、分類され、特定の状況にある者は取締りの対象になっていく。それは、朝鮮動乱期に起った特需の背景にある人びとの実践と制度との相互作用の過程であり、市が自身の市勢要覧における繁華街の記述を大きく変えていく背景にある社会の在り方だった。

### 参考文献

思想の科学研究会，1978，『日本占領軍その光と影—共同研究』，現代史出版会。